

「東京」の諸問題提起

文人の 武蔵野

三浦朱門（1926～2017年）の小説「武蔵野インディアン」〔文藝〕1981年4月号）に登場する「武蔵野インディアン」とは、どのような存在なのでしょう。一言で言うと、先住民の権利を主張するための呼称だと

三浦朱門 ②



三浦朱門の小説「武蔵野インディアン」

思います。作中で、代々多摩、武蔵野地域で暮らしてきた人たちが「原住民武蔵野インデ

イン」と自称するのは、あえてそうしているのであって、「インディアン」を蔑んでいながらも「原住民」を差別的な表現とみなしているわけでもありません。

先住民の立場から考えると、近代化というのは暴力的な営みにほかなりません。作中では、神奈川だったところが何故か東京に編入されたことについて何度か語られています。握え方によっては、行政区分の設定や変更もまた暴力の一つです。

中学校などの学区制についても同様で、「武蔵野を東京の一部にするための政府の陰謀」という表現で説明されています。

また甲武鉄道が国鉄中央線に組み込まれてしまったことについても言及されています。作中では、地域に根ざした民間の鉄道を明治政府がとりあげたと説明されており、確かに先住民の都合を考えずに行った政府の暴力という解釈が成り立ちます。

線の引かれていない土地に線を引き、向こう側とこちら側との間に制度的不均衡をつくることは、歴史的にみれば支配者の仕事だったと言えます。その結果、税金も医療費も教育費も住宅費も生活費も

住む場所によって異なる、いわゆる地域間格差が生まれてきました。「武蔵野インディアン」は、現在「東京」とひとくくりにされている地域の中にある見えにくい諸問題を、国際的な視野に立って平和的に考えるきっかけを与えてくれる小説です。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。